

V. 情報化の問題

次に、情報化の問題でございます。これは、今度の審議会ですら初めて強調されている側面だと思えます。これは大変大きいことだと私は思うのでございます。

1. 社会の進歩に遅れる学校

テレビが普及いたしまして、ハイテクノロジーがどんどん進んでいきます。子供たちはパソコンゲームをやります。ところが、学校はそういうことと関係なしに、黒板で明治以来のやり方を繰り返してやっているのですから、子供の住んでいる世界と学校でやっていることとの間がかなりずれてしまうのです。印刷物は、学校ができる前にあり、学校ができた時に印刷教材で仕事をするようになっていました。学校はいぜんとして印刷学校であり、印刷物で仕事をしていて、その域から一步も外へ出ないのです。

ところが、今市民社会はどうなっているかというと、印刷物はだんだん読まなくなり、みんなテレビです。ウォークマンでイヤホーンを耳にし、電話で、パソコンで用が足りるのです。この頃では、作家の人達が原稿を自分のうちでワープロを叩いて作り、ファクシミリで送るのです。三浦朱門さんだって曾野綾子さんだって、そんなことをやっているのです。

そのように社会が科学技術によってどんどん進んでいる時に、学校はいぜんとして印刷学校なのです。これには海外から来た人が、びっくりするのです。「日本はこれだけコンピュータを世界に輸出し、エレクトロニクスで世界を席卷しているのに、聞いてみると日本の学校はコンピュータの使い方ひとつ教えない。これはどういうことだ。」と言います。

2. 人間社会を大きく変化させる

このコンピュータの入ってきた情報化の時代というのは、今その大きさ・意味あいというのは良くわかりません。しかし、ちょうど印刷機が発明されたと同じように、今後50年たってみた時に、ものすごい大きな変化を人間社会にもたらすだろうと思えます。

印刷機が発明された時に、人間の知識は頭脳に固定しないで印刷物に固定することが出来るようになり、普通の言葉を印刷出来るような言葉にし、日常の話し言葉と書き言葉を上手に一体化するという努力が各国で進んで来たのです。

印刷機が出来る前、キリスト教の牧師さんなどは、みんなローマ字・ギリシャ語でコミュニケートしていたのです。つい最近まで、ローマにありますバチカン王国、イエズス会という教団は、~~ローマ~~^{ラテン}字で世界中にやっていたのです。そうしないと、教団としてのコミュニケーションがうまくいかなかったのです。しかし、だんだんそういかなくなってきた。ですから、上智大学の学長しておられたピタウ先生がローマへ帰られて、「とうとう現代語をどうい^いう形^で使^っていいことにしたよ。」とおっしゃっていました。そこへくるまでに、カソリックの世界で言うと、印刷機が出来てから五百年かかっているのをごさいます。

3. 文明的变化への対応が迫られる教育

けれども、今パソコンやフロッピーデスクという大変な物が出来てきました。あの中に、ものすごい記憶容量があるのです。そして、あのフロッピーデスクを上手に使える能力がないと、これからの技術社会では要するにコミュニケートすることが出来ないというような時代がやってくるのです。

学校の先生は、自分がなかなかそういうことについていけませんから、「子供が遊んでいる、パソコンやコンピュータや計算機を持って来ては困る。」という姿勢であります。しかし、そんなことを言っていたのでは、将来に向けての対応にならないのです。

これは、大変大きな文明的な変化が今起こっていると思うのであります。それは、どの程度人間的であるかどうかという点については、ちょっと問題です。物も言わないでパソコンの前に座ってキーを叩く、何か頭がおかしくなっていく、そういう人間が増えるかも知れません。困ったものです。しかし、流れとしてはどうも人間が作り出してきた素晴らしい技術によって、押し流されて行くと思います。

この情報化の影響は、これからの教育でほっておくわけにはいかないのでござい
ます。

VI. 高齢化の問題

もう一つは、高齢化の問題で、みなさんがひしひしと感じておられると思います。

1. 勤務年数より長い退職後

私が役所をやめたのは8年程前になります。その時に「やっと大過なく勤めさせていただきました。」と、お世話になりました森戸辰男先生の所へごあいさつに行きましたら、「あなた、私の齢になるまでは、今まで勤めておったよりもう少し年月がいるんですよ。」と言われて、びっくりしました。先生は、その時もう87か8でしたでしょうか、かくしゃくとしておられました。なるほど、考えてみると、私が役所で勤務した年数よりも、先生と同じ年齢になるまでの方が長いのです。「これは大変なことだ。」ということを実感いたしました。

2. 重くなる子供の負担

今、政府は60歳定年と言っておりますが、そんなことでは、もうもちません。私は、今経済審議会に入りまして、「長寿社会の構造は、どうなるか。」という話合いをしております。その中である委員が、「最近聞いたお医者さんの話では、長寿を保っているのは、大正の一桁・二桁、昭和の一桁くらいで、それ以後に生れた者は、みんなひ弱くて早く死んでしまうというのです。そうすると、高齢化社会と言っても、それは大正一桁・二桁の時代に生れた者でないと高齢化にならないのではないか。」と言うのです。それは、高齢者の世代が重くなり、若い世代がますます細くなるのですから、恐ろしいことです。

今、みなさんが子供を生んで下さらないから、一人っ子が多いのです。私どもの子供の世代もそうです。戦後のあのどさくさの限りの中で、子供をたくさん生んでいる余裕はなかったのですから、一人っ子が多いのです。

その一人っ子の子供がペアを組みますと、親を4人抱えることになります。ところがその子供の親の親である、おじいさん・おばあさんのどちらかが残ってしまから、ペアの子供は1組で4人の生き生きした60歳そこそこのお年寄りと、80歳代のおばあさん・おじいさんを二人ぐらいは抱えていなくてはなりません。これは、大変な重さでございます。

3. 教育費を越える老人医療費

石井議長さんは、全国の自治体病院のお世話をやってくださっているそうですが、この老人の医療費はものすごく増えているのです。今や正規の医療費が、15兆円を越えました。新聞でご覧の通り、高くなったり低くなったりすることはありますが、年々10%近い勢いで伸びているのです。教育費は、18兆円から19兆円く

らいですから、後7～8年の内にひっくり返ります。老人は増えますから、日本の社会は老人の医療にお金を出して、教育により少ないお金を回す状態になります。

私は臨教審で、「これは大問題だ。そんなことではどうにもならないじゃないか。高齢化社会について、真剣な対応を考えなくてはいけないのではないか。」と言うのです。けれども、「今の医療費のシステムが悪い、高齢者に対して追い銭のようになっているのがいけない。年をとった者は、だんだん消えて行くのだから、あまり医療費を出すことはない。」と言うのでは困ります。医療費に力を入れて、やっともとととです。日本人の能力をより大きくしなければ、将来の社会を支えていけないのです。特に若い世代ほど、少ない人間で多くの老人を抱えるのです。これからの重たい日本の高齢化社会は、やはり国民総ぐるみで対応しなければならないのでございます。

4. 社会のシステムを変えて活力を生む

私も孫と一緒に住んでいますが、私の親と家内の3人だけの時は何も言わない静かな家庭です。しかし、活力がないのです。日本の社会全体の活力がなくなったら困るのですから、高齢化への対応をどう考えるかは、教育界の大問題です。

そこで、高齢化社会では、労働時間の配分やいろいろなことの配分を考え直していかないとならないのです。今までの日本では、20歳までは勉強し、それから一生懸命仕事をし、そして60歳以後の20年間は余暇だというのでは、仕事をしている者にしわが寄り過ぎ、負担が重過ぎるのです。ですから、これからの高齢化社会・長寿社会を考えますと、①仕事をすると同時に勉強もし、仕事も死ぬまで出来るようになり。②勉強もある一時期だけではなく、何時でも出来るようになり、③仕事も何時でも出来るようになる。この3本が平行して、生涯動いていくようにならないといけないと思うのです。このような社会のシステムを変える努力をしないと、高齢化社会への対応はできないと思うのでございます。

国民生活白書をご覧になるとわかるのですが、40歳代の後半から50歳代の前半の者が世帯主の家庭は、年間二百万円の赤字です。教育費も医療費も高い、住宅費も高い、土地政策も困ったものです。こういう社会の仕組みを全体として変える努力をしないと、私どもは元気ですが、次にくる人達の体力や気力やエネルギーや、能力はどうかということを考えて、「若い者を頼ってはいけない。」と、お年寄りがかんばっているのは楽しいのですが、頼りにならない若者では困るのです。だから、どうしたらたくましい子供たちにし、支えてもらう子供たちを大きくしていけるか、これは大問題でございませう。

Ⅵ. 教育の「育てる」

学校のシステム・教育のシステムは、今申しあげた3つとは、全然かみあっていないので、考え直さなくてはいけないのです。

1. 家庭で「育て」学校で「伸ばす」

今問題になっていることは何かと言いますと、家庭と教育の間が具合悪いのです。子供が「育つ」ということは教育の前段階でして、子供が育って大きくなってきた時に、知恵を伸ばしてやるのが学校なのです。

ですから、しつけなどは、親が家庭できちんとやることなのです。さらに、どういう職業につくかということや職業技術の訓練も、親が必要ならば“でっちこぞう”に出して身に覚えさせることなのです。

学校は読み・書き・算数をやるということのできたのですから、教育は読み・書き・算数に体力も含めて、上へ引張ることだけをやっていると考えるのでございます。

2. 教育の基礎の「育」の問題

ところが、今問題になっているのは、教育の基礎の「育てる」という“教育の育”のところでききてしまったのです。

①小児科医の心配

小児科の先生の心配されることは、赤ん坊から親を早く離せば離すほど、母親は母性の自覚がなくなり母乳も出なくなる。だから、生れた子供はできるだけ早く母親と近付けて、10か月の長い間聞き慣れた、母親の鼓動のリズムを聞かしてやらなければ、安心できないのです。そして、視覚も聴覚も発達しないというのです。

②保育は家庭で

松戸市よりもちょっと小さいある市の助役さんと話をしておりました時に、「0歳児には一人月30万円かかり、大変なのです。」と、保育所の苦勞話をなさいました。ですから、私は助役さんに「それなら、むしろその親ごさんに月10万円ずつあげて、3人の方には0歳児の間は家庭で育ててもらう方が、算盤勘定がはるかにいいですよ。」と言ったのです。そういう無理をするから、学校に入った時に、先生が対応に困る子供たちが増えていくのでございます。

③学校へ家庭相談が

私の知っているある幼稚園の園長さんが、「この頃は、幼稚園の子供たちが砂場で遊んでいるのを見ると、言葉を言わないで叫び声を発している。それはテレビの

影響でしょうね。」と言うのです。これは、情報化というものの恐ろしさですが、親との間の対話も少ないのです。保育所に入っているお子さんは、そう言っただけでは悪いのですが、発育は遅れるのです。

つぎに、もう一つショッキングなことをおっしゃいました。「この頃は、幼稚園に子供を預けに来た方に預りますと言うと、安心しました子供を園にお預けしたら離婚をしてもいいでしょうかと言うのです。どう答えていいのか困ります。」ということです。そういう家庭相談が学校の先生に持ち込まれるのです。

④子供の半分は片親

ところが、アメリカの本を読んでみますと、先生方は家庭相談の心配をしなければならないのです。今のままですと、アメリカの男性と女性は一生に一度離婚するという数字になっているのです。だから、学校の子供たちの半分近くは片親です。

その片親に育てられる子供を、どのように面倒を見てやるかということが、受持ちの先生の大変な負担になっているのです。日本の学校の先生も家庭訪問をしていますが、いろいろと家庭の事情があり、どうにもならないものから困ってしまうのです。それで、学校の先生も汗かいてしまいどうしていいかわからないのです。

心理学を研究している人たちなどから聞きますと、要するに生れてからあとの、「三つ子の魂百まで」の3歳までと、小学校が終わる12歳までが大事なのです。その時期に自分で行動できるようになれば、成人してからはきちんといくのです。

3. 学校の先生が気を使っていること

私が国立教育研究所におりました時に、各県の教育センターと協力して、小学校・中学校・高等学校の先生に、「何が一番気を使っているか。」という調査をしました。その結果は、1番目が「体力をつけてやること・がまん強い子供にすること」でした。下手にがまん強くして、いじめられてはどうにもならないのですけれど。「かわいがる・慈しみの心を育てやること」が、小・中・高等学校の先生ともトップなのです。「学力をつける」というのは、小学校の先生で5番目、中学校の先生で4番目、高等学校の先生でやっと3番目です。要するに、それほど学校は保育所になっているし、先生方は保育をやっているのです。

これは、家庭の保育がだんだん社会化して、外へ行ってしまい、結果的には手薄になったことの現れです。大変皮肉な現象ですが、学校は保育に追いまくられ勉強は塾という、おかしい流れになっているのです。ですから、学校の先生までが堂々と、「あなたのお子さんは、勉強ができませんから塾へやってください。」という指導を父兄にされるようになったのです。大変困った変化です。教育の「教える」ということだけではなく、「育てる」という土台が抜けていたということです。

4. 教育のシステムが基本問題

松戸の教育長さんが、お訪ねくださった時に、「市のあらゆるセクションが協力をするようなシステムを作ることが基本だ。」ということをお話しました。幸いに議長さんのもとで、みなさんが集まって審議されておられるのですから、それをやってもらいたいのです。そうしないと、その部分部分だけで受取ったところだけで汗をかいておっても、今のような大きな世の中の変化の流れのある時には、どうしようもないのです。

学校の先生も、世の中の変化に否応なしに対応させられているのですが、少し積極的に手を出していくことを考えなければいけないのです。

要するに、これらが教育をめぐるいろいろなシステムについて、考え直さなければならぬ基本の問題点でございます。

そのことを、関係者がお互いに理解し、どう手をつないで、人間のライフサイクルの大きな変化・社会システムの変化に対応していくかということでございます。

5. 地域の人の協力で環境が変わる

学校の地域社会化は、学習だけでなくスポーツも体育もあっていいのです。ですから、学校の校庭が地域の運動場になるという方向は、当然進めなければならないのですが、教育問題を教育だから学校だけでやるのでは、うまくいかないのです。

荒れる学校を直していった地域の話をお聞きますと、学校に子供をあげているかどうかに関係なしに、校庭の前のお店やさんの人たちも、子供たちに毎朝呼びかけることが大事なのです。忠生中学校を引継いだ校長さんが、最初にやったことは、町内会の責任者を回って、「うちの学校の子供たちに、みなさんも声を掛けお早ようと言ってやってください。PTAであるなしにかかわらず、校門を出入りする子供たちは、自分たちの町の子供だという意識で、注意もしていただきたいし、声も掛けてやってください。」と町内会を回って説かれたのです。そういう地域の人の協力のによって、環境が変わることで子供の気分が落ち着いてくるのです。

VIII. 学習するとは

教育は、「教えること」だけでなく「育てること」だと申しあげましたが。

1. 教えられることの限度

「教える」という側面で考えても、教育で教えられるものは、限られているということを考えなくてはいけないのです。その一番いい例は、皆さんが自分のお子さんに教えてご覧なさい、だいたい子供さんは言うことを聞きません。私が自分の子供に対応しても、なかなか自分の子供は親の言うことを聞かないのです。

川柳に「おのが真似するなと親は子に意見」というのがあります。「おれの真似をするのではない、こうしろ・ああしろ」と言っているのですが、子供は全然親の言うことは聞かないのです。けれども、親のするようにするのは、これが、今あちこちで起こるのですから社会全体の問題ということがあるのです。

それは何故かといいますと、知識は発育の過程のごく限られた部分でしかないということです。知識を使ったら相手が受取るかといったら、テープレコーダーほどうまく受取らないかも知れないのです。

要するに、自分で覚える気にならなかつたら何も覚えられない。自分でやる気にならなかつたら何を言われても、「馬の耳に念仏」ということになるのです。従って、教育で先生方が一番苦勞するのは「どうしたら自分で勉強するようになるか」ということなのです。

お母さん方は心配して、一生懸命宿題をやらせますし、大学の入試にまで親ごさんが付いて行かれます。高等学校くらいまでは、英語の指導がなんとか出来るとおっしゃいます。しかし、結局は、はかないことなのです。“どうしたら自分で勉強するようになるか”ということを実感させることが、教えられる限度です。あと必要なことは、自分で勉強するしかないのです。

2. 面白いから学習する

これもショッキングなことなのです。

今、みなさんの地区ではテレビの16チャンネルに回していただくと、放送大学の放送がいっぱい出てきます。実は、あの番組を作る時に、大学の先生は「わしの言う通りテレビに写しておればいいんだ。教室で写せばいいんだ、それが放送大学の放送である。」と言うのです。ところが、NHKや民放から来たプロデューサーは、「そんな馬鹿なことを言ったら見る人はいません。だからプロデューサーの言うことを聞いて出演をしないで。」と言うのです。これは、放送大学で一番大きな喧嘩の種だったのであります。

そこで、困ったプロデューサーたちが、一計をあんて「いろんな実験番組を作ろう。」ということにしたのです。そこで、東大の柳川啓一さんという宗教学の教授が、都内のある女子大の学生に教えている教室へ行って、録画を撮るなどして6通りの実験番組を作ったのです。

1番最初の番組は、教室の一人の学生の椅子にカメラを据えて、一時間教授だけを写して、学生が講義を聞いているのと全く同じような状態で録画をした。

2番目は、教室の中に3台のカメラを入れて実況中継をしたのです。カメラは時々学生を向いたり教授の方を向いたりするのです。

3番目は、スタジオで先生がきちんとテレビカメラに向かって講義をする。その時に、今放送大学でもやっていますが、ちょっと図表を使ったりいろいろな説明の材料を使うのです。

4番目は、「天国と地獄」という宗教の講義だったので、教授が鎌倉のお寺へ行って住職に話をしたり、地蔵の話をしたりして、これはこういう意味のことだったと話すのです。

5番目は、プロデューサーが柳川教授のノートを借りてきて、その中からプロデュースしたのです。いろんな画面が入っているのです。

6番目は、ノートがあるだけで柳川教授もなにも出てこないのです。プロデューサーが作った番組に、アナウンサーがみめ麗しい声で解説を付けたのです。

このような6つの番組を作り、もう一遍その女子大の学生に「どの講義が一番わかり易かったか、面白かったか。」などの3つか4つの項目で学生たちに○を付けさせたのです。そして、放送大学に集まってきた大学の先生方に、同じように評点を付けさせたのです。大学の先生方はさすがに、一時間ストレートに写しているのは、「どうも間延びしている講義で面白くない。やはり見るため、うちで勉強するためには、スタジオできちんと講義しているのが一番よろしい。」そして「プロデューサーが演出をした番組は、講義ではない。」と言うのです。私もそうだと思っていたのです。ところが、若い学生さんたちの評価は全く違っていて、1番始めが一番だめで、後になるほどいいのです。「先生の出ていない番組が一番いい。」と言うのです。これには、私もびっくりしました。圧倒的な評価の違いなのです。

それに困って、私はヨゼフ・ピタウさん（元上智大学学長）の所へ行き、「これでは教育というのは、なんだろうかと思うのです。今の学生は、そんな反応を示すのですが大丈夫でしょうか。」と言ったら「それは、学生の反応が正しいですよ。聞いて面白くもない講義というのは、講義にならないでしょう。本当の講義というのは面白いと思って聞いて、その次から学習が始まるのです。それが勉強なのです。だから、面白いと思って学生が関心をもたないような講義なんていうのはだめですよ。」と、はっきりと言われました。これには、私も参りました。

3. 生涯発展し続ける学習

ところが、大学の先生を初め高等学校の先生も、学校の先生の意識というのは、そうっていないと思います。

「何故そうならないのだろう。」と考えてみると、やはり時代が違うのです。

私どもの時代にはテレビはないし、ラジオは空襲警報やニュースだけでしたから、それを聞きながら勉強することはありませんでした。一生懸命本を読んだものです。ところが、テレビが出来てからの子供たちは、テレビ漬で音がないとなんとなく落着きが悪いという環境の中で育っているのです。そして、我々はあのチャカチャカした作った番組なんていうのはやりきれないし、メロドラマなんていうのは、歳のせいもありますが見たくもないのです。やはり、お相撲か、国会の実況中継の方が対応できるし、まだましなのです。

ところが、子供たちは違うのです。あのチャカチャカという音に育てられているものですから、一時間じっくり人の話を聞くのは退屈して、どうにもしようがないのです。そういう変化を考えないと、大変なことになるのです。

そして、一番の基本は、結局自分が自分で勉強したいことを勉強するようにならないければ、一生涯続かないし発展できないのでございます。

4. 自分でスパートさせる

ロンドン大学で教授をしております森嶋先生が、文化勲章を受けた時にお話をうかがって本当に感心したことがあります。

人間の能力というのは、ある時期ある時期で、スパートをしなければならぬことが何回かある。ロケットだって、一番最初めに一段目のロケットをパーツと噴射して終りでは、結局たいした所へ行かないのです。ロケットを何段かつないで、その時その時に自分で噴射していくのです。

私は、それ程才能がないと思ったから京都におったのですが、何故京都からノーベル賞受賞者が出るかと言いますと、それは自分の好きなことをやる者がいて、好きな時に好きなことを一生懸命やって、その時その時にそれぞれ自分でやっているからなのです。京都という環境は、それが出来るのです。

「基本的な能力の問題は、ペーパーテストの問題ではないのです。」と森嶋さんはおっしゃるのです。

5. 学習が生涯教育の本質

人生80年です。私も、10年に一回一遍ずつスパートをしていって、この間なくなつた入江特従長のような最後を迎えることができれば、こんな素晴らしい人生はありません。ですから、そういうことを考えていかななくてはいけないのです。結局、生涯にわたって自分で学習をするのですから、臨教審も「生涯教育というのは紛らわしい。」という意見がありました。生涯教育の本質は学習なのです。そこで“生涯学習”という言葉に変えました。

学校では、生涯にわたって学習できるような、対応の仕方を教えてもらうということになると思うのです。そして、地域社会のあらゆる職域の方、あらゆる年齢・階層の方々が、それぞれ生活をしている中でスパートをかけなければいけません。仕事を通じて仕事だけスパートして、勉強がスパートしなかったら、仕事が成功するはずがないのでござります。

6. スパートを助けるシステム

地域の活性化というのは、自分でやる気のある人がエンカレッジできるお膳立をして、スパートを助けていくようなシステムをつくることなのです。

その意味で、松戸市の教育構想を審議するなかで、年代別に「取り組む事項」というものが用意されています。また、健康・文化・福祉、それぞれの観点ごとに、どういう施策を地域でしていかなければならないか。そのために、みんながどううふうに手をつながなければならぬかを検討しておられます。松戸市教育構想審議会の検討結果がどのように動いて行くか、これは大変頼もしいと思っていますし、心待ちにしているのでございます。

IX. おわりに

秋田県の知事さんが、10年前に秋田県の生涯教育構想を立てられました。一生懸命旗を振られました。これが日本で一番最初だったかと思えます。その時に「一番困るのは、教育界の人がなかなか対応してくれなくてね。」と、おっしゃっていました。松戸市では、そうならないようお願いしたいと思うのでございます。どうも長時間にわたって、ご清聴いただきましてありがとうございました。